



「一粒の麦 萩野吟子の生涯」でメガホン握る山田火砂子監督

写真提供：(株)現代プロダクション

福祉の映画を作った初の映画監督

思い切って飛び込んだら 新しい世界が広がった

山田 火砂子 映画監督

90歳、日本最高齢の女性映画監督 山田火砂子監督の最新作「われ弱ければ 矢嶋楯子伝」が今年1月公開された。火砂子監督の長女は重度の知的障害者、まだ福祉という言葉すらない時代に子育てを経験したからこそその作品も数多くある。次回作にも意欲をみせる監督に最新作に込めた思いや原動力を聞きます。

知的障害がある娘に
導かれて

山田火砂子監督(以下 火砂子監督)は昭和7(1932)年東京生まれ、29歳で結婚、昭和38(1963)年に前夫との間に長女を出産。生まれた長女みきさんには重度の知的障害があった。

長女の誕生をきっかけに人生観などが変わった火砂子監督は次女も誕生していたが離婚をし、その後、みきさん8歳、ゆうさん3歳



平成19(2007)年 提供：(株)現代プロダクション

の時に現代プロダクション代表の山田典吾監督(以下 典吾監督)と再婚をする。

「平成8(1996)年に上映された『エンジェルがとんだ日』というアニメは、典吾監督と再婚後に私が初めて監督をした作品です。長女の知的障害者みきと次女のゆうと過ごした30年間の実話をもとに私が脚本も書きました。ここからですね、実在した人物の功績に光を当てた作品を撮るようになったのは」

福祉という概念がなかった明治時代、一人の子どもを預かったのをきっかけに3000人もの孤児を救い、岡山県に日本初の孤児院を作った石井十次の生涯『石井のおとうさん ありがとう』で初めてメガホンを握り、児童福祉文化賞を受賞した。

「知的障害児を持つ親が設立した『手をつなぐ親の会』(現・全日本手をつなぐ育成会)というのがありましてその理事長をやっていた方が私の顔を見るたびに石井十次、石井十次と言いつづけていました。

そのころは再婚した典吾監督とお金のことでしょっちゅう夫婦喧嘩していた頃ですから、今日も夫婦喧嘩? あんなの別れちゃえよ、あんなの放っておいて監督やれよ、石井十次撮れよーと言っていましたね(笑)。その時に石井十次を調べていましたから、メガホンを握るまで20年以上あたたためたことになりました。

石井十次は日本の福祉の父と呼ばれる偉大な人物ですが、彼のことを知っている人はあまり多くありませんでした。

ちょうどニュースで12歳の子どもが殺人事件を起こしたことを知り、なんて世の中なんだ、と思いましたが子どもが人殺しをしないような映画を作りたい! 世直しの映画にしたい! そんな思いを抱いて石井十次の生涯を映画化しました。大原美術館を設立した大原孫三郎さんとの交流も描いてい

ましたので、この映画は宮崎県の全ての中学校で上映されました」

その後、日本初の知的障害児教育を実践した石井筆子の半生『筆子 その愛天使のピアノ』を常盤貴子さん主演で映画化。障害児教育施設・滝乃川学園は皇室ともゆかりがあり、筆子が所有していた日本最古級のアップライト・ピアノは当時の皇后美智子様が弾かれたことでも話題になった。

「太平洋戦争時代、知的障害者施設というだけで配給も満足にもならなかったそうです。石井筆子さんもほぼ餓死のような形で終戦を知らずに、昭和19年に82歳でお亡くなりになってしまいました。最後まで子どもたちを守ったと思います。筆子の父は大村藩(長崎県)藩士

でしたからお嬢さま育ちで、成人後には華族女学校で教鞭をとるかたわら、津田梅子とは大の仲良しで女性の地位向上を目指し動き出していました。時の皇后の命でフランスに留学もして、帰国後は社交界で鹿鳴館の華、とも呼ばれたそうです。結婚し、三人の子どもに恵まれましたが、二人が知的障害児で残る一人も虚弱児で生後ま

もなく死亡。夫にも先立たれさまざまな苦難があったと思います。が、再婚した石井亮一と共に障害児教育という当時の日本社会における影の部分に生涯を捧げた日本のマザー・テレサのような女性でした。仲良しだった津田梅子は健常者を相手に学校を作って有名になり、石井筆子は障害者が相手の学校でしたから存在を知る人がごく僅か、ということにもものすごく腹が立ちました。

世に知られるべき人が知られていない、その現状に本当に腹が立って映画化を決めました。製作費が無かったので先に制作協力金を募ることにしました。『手をつなぐ親の会』が大きな力を貸してくれました。

筆子さんも監督も障害児を連れた再婚だから筆子さんの気持ちがよくわかるんじゃないの? なんてよく言われました(笑)」

そして、石井十次とも交流があり、児童自立支援に奔走した留岡幸助の人生を描いた『大地の詩 留岡幸助物語』を80歳目前に公開。留岡幸助は福祉の教科書にも登場する。

「留岡幸助は一人でも不良と呼ばれる青少年を救えば、国益ではないか」と必死に更生を考え、明治時代に非行少年の更生を目的とした感化院（現在の児童自立支援施設）『北海道家庭学校』を創設しました。

現在も北海道遠軽の地に、その留岡幸助の魂は生き続けています。

この映画を作るなかで、北海道道路工事には囚人が参加し、亡くなった方もたくさんいることを知りました。今でも遺骨が出てくるという事実を知り、その囚人たちの生活を改革しようと留岡幸助が戦った日々、映画を作っていくうちに私自身知らなかった歴史の勉強にもなりました」

実在した人物とその功績に光を当てた社会派作品を撮り続けるにも意味がある。

制作の多くが文部科学省や全国PTA協議会などの推薦作品として推挙され、福祉施策の歴史を題材にしたものは、社会福祉法人や大学の社会福祉学部などの各所で、福祉教育のレジュメの一つとして活用もされている。

広がった世界



火砂子監督は福祉をテーマにした作品の初の映画監督としても知られるが、再婚した頃は喫茶店を経営しながら子育てをしていた。何故、監督になったのだろうか。

「典吾監督とは、社会的弱者と呼ばれる人々を『光』にした映画を作



映画製作発表 山田典吾監督と（写真提供：火砂子監督）



長女みきちちゃんと

りたいと意気投合しました。でも、まず再婚していなければ監督にはなっていなかったでしょうね。

仮面ライダーなどの東映特撮番組を世に送り出した内田有作という男がいました。彼は生田スタジオの所長もやっていましたよ。東映を辞めてからウチの事務所までゴロゴロしていた時期があり、ちやこさんは監督になれる、典吾には才能が無い、って、本人の前でよく言っていたの（笑）。若い頃から知っていたこの内田有作の言葉は今思うと大きかったですね。一歩踏み出してみると新たな世界が広がる可能性があります。

ちょうど再婚した頃はテレビが全盛になり、映画は斜陽でした。そんな時代でしたから気が付いたらプロデューサーとして金策に走り回り知らないことだらけ、無我夢中で典吾監督と一緒に映画を作り、典吾監督が平成10（1998）年に亡くなってからはひたすら福祉に関する人々を題材とした映画を作り続けました。メガホンを握りだしたのが70代ですから、なんか天からもらってきたような気がしています。

でも、ホントはね、典吾監督と一緒になったらもう一回女優になれるかも？なんて思ったの（笑）、でも私も40代になっていたので、年寄りの女優を売る人なんていないよ」と典吾監督に言われ、上手いこと言うな—と思つて女優の道は諦めました（笑）」

芸能への入り口



実は、火砂子監督は16歳で戦後初の女性バンド「ウエスタン・ローズ」でギターを弾いていたという逸話がある。

「私の父は40歳で他界し、母親が一人でしたからお金を稼げる道は何か？と考え、親孝行したくて大映のニューフェイスを受けたのが始まりです。結果、落ちましたが、聴講生のような形で勉強しないかと誘われ、学校を休んで半年間くらい、演劇の勉強をするため通いました。いったん、学校に戻りましたが、演劇なんて勉強したのだから頭がおかしくなつて（笑）、そのまま学校は辞めてしまいました。その頃に近所の大学生や演劇の仲間とハワイアンのバ

ンドを結成し、終戦から3年経っていましたので、ビアガーデンのような場所で演奏をしていましたね。結構人気もあって楽しかったのだけど、女性だけのカントリーバンドを作るといふ人が訪ねてきて、ギターをやらないかと誘われ、それでウエスタン・ローズをやるようになりました。テレビ局が開局され、ウエスタン・ローズはよくテレビにも出演し、ディレクターからこれからもっと売れるようになるのにと惜しまれる時期に解散。ラスベガスからも誘いがあり、もつたいなかったかもしれないが、みんな年頃だったからね、それぞれ事情があったのよ。

私は解散後、やっぱり芝居をやりたいと思って軽演劇の道へ。当時は新劇がブームでしたけど新劇に入る気は無かったので、娯楽性を重視してお笑いなどのコント要素も含まれる軽演劇に進みました」
こうして新しい生活が始まり、演劇を通じて前夫と知り合い結婚した。

「前夫は情けない人だね。みきが障害の子どもで恥ずかしいから誰もいないところでこっそり暮らそ



「ウエスタン・ローズ」としてデビュー（右から二番目）

軽演劇で舞台に立つ（真ん中）

う、と言いだして。私は反対に暴れてやる、というただだから結局、気が合いませんでした(笑)。

新協劇団という、当時では一流の劇団の劇団員になったのに、いい芝居をやるためにはお金を稼ぐ必要があるから商売をやるうなんて言い出して。いい役者をやるた

めに商売をするなんて絶対にあり得ません。役者ならどんな苦勞をしても役者をやり続けていい役者になっていくのが普通です。でも私もだんだんそれに巻き込まれていったので、私の実家がパン屋さんだったのでその隅っこで喫茶店を始め、スナックをやりクラブをやり、結局全てが無くなった。そういう人で、最後まで役者はできなかったわね。でも典吾監督の作品に前夫が出演したのが私とのご縁の始まりでしたから、不思議なご縁ですよ」

知恵遅れと告げられ



みきさんを出産した頃はまだ軽演劇で舞台にも出演し、前夫と喫茶店も始めていたので1歳になつたみきさんを近所の保育園に預けるようになる。

「みきを保育園に預けるようになって、保育園の先生から様子がおかしいと言われるようになりました。こんなに可愛いのに、何がおかしいの？ と、おかしいと言われても気にしないようにしていましたが、どうしても同じ年頃の子

どもたちと比較をしてしまうようになり、気持ちに焦りが出てきて、あちこちの小児科歩きが始まりました。小児結核かも知れないと言われたこともありましたが、歩かない、立たない、しゃべらないといったって少し他の子より遅いだけじゃないかと思いつつも不安で眠れない日々が続くようになります。そして2歳の時、慶應精神科で『この子は知恵遅れです』と告げられました。どうやってこの子を抱えて生きていこうかと泣く日々でした。自殺を考えて線路の淵をさまよつたこともありました。この頃からみきは危険な行動もするようになり、目が離せない日々が続くようになります。福祉という言葉も障害という言葉もない時代ですから『知恵遅れ』『精神薄弱児』と呼ばれ、そんな子どもを抱えて生きていくのは本当に困難で、障害児と一緒に自殺する人が後を絶たない時代でした。学校にも行けず、隠れるように家の中で過ごしていた子どもが多かった時代です。私も近所の子どもにバカ、バカ、バカの家と、玄関から壁中に書かれた経験があります。そ

んな時代でしたが、そういう子どもを預かってくれる病院の幼稚園があることを知り、週一回だけでしたが、そこに連れていくことにしました」

前に進み始めた火砂子監督は、近所の保育園にみきさんを預けながら週一回は愛育病院の幼稚園に行き、他にも月一回、児童相談所へも通うようになっていた。

人生観が変わる



この頃にはもう泣いてばかりいられない、この子と一緒に生きてゆくのだからと、ようやく強く思えるようになったという。

「児童相談所では、担当の先生にあなたに会うのが楽しみと言われていました。他のお母さんはここにきて皆泣くけど、あなたはいつも笑っているよ。」

気づいたんですよ。知恵遅れ、治す薬もない、そう言われ絶望の日々の中、結局は自分が馬鹿の子を産んで連れて歩くのが恥ずかしかっただけだと。それで、こうなったらもう開き直ってやれ! と思い、児童相談所からのいろいろな情報も

増えていき、みきを養護学校に受験させることにしました。

当時は教育大学付属大塚養護学校といまして、150人くらいの受験生がいて合格者は僅か3名という狭き門でしたが、みきは合格して、大塚養護学校小学部の一年生になりました。

数年前にはガガーリンの宇宙飛行達成がニュースになっていて、すごい時代がきた、それなら頭の良くなる葉だつて簡単に開発される時代が来る、なんだか急にふとそう思い、自分もみきのために勉強しなきゃいけない気になって(笑)、本を読み漁るようになってしまった。なんだかわかりませんが、みきが入学してから、とにかく勉強したくなったのです。みきとの

日常の中で気づきや学びがたくさんあり、否応なく生き方を見直す必要に迫られるようになったのでしようか。私の人生観が大きく変わろうとしていました。

次女のゆうも生まれていましたが、私がどんどん前に進もうとしているのに誰もいない場所でひっそり暮らそう、とか言っていて縮こまっている前夫とは一緒に居られなくなり離婚しました」

福祉活動に貢献した歴史的な人物の映画を撮り続けてきたという経緯には、火砂子監督の知的障害児を取り巻く社会環境と闘いながら歩んできた、という人生経験があった。

戦争体験からくる作品



火砂子監督の作品テーマにはもう一つ、戦争がある。そこには自身が13歳の時、東京大空襲で家を失うという戦争体験があり、映画を通して戦争の悲惨さを伝え続けたいという思いがあった。

「空襲の時、すごい火で家が燃え上がるのを見ていました。火の風が吹き荒れ、空を見上げればB29の飛行機がぶつからないかしらと思うほど飛んでいて、この時、国に嘘つかれた! と思いましたね。」

2014年に上映された『山本 慈昭 望郷の鐘 満蒙開拓団の落日』も原作を読んで、敗戦が濃厚となっているのに国策を信じて満州に移り住んだ人たちをおぼけてきて、なんで助けてあげなかったのだろう。20年もほったらかしにおいて! 日本国家って何だろうと思ひ、よし! この映画を撮ってやろう、そう思いました。この映画は戦後70年平和祈念映画になりました」

戦争の悲惨さを伝えるためには残酷なシーンも必要だが、敢えて火砂子監督は子どもの視線を考え、そういうシーンを描かなかつた。

「残酷なシーンで子どもが怖い思いをして逃げだして観てくれないと意味が無いでしょ(笑)。お陰様でこの映画は日本PTA全国協議会からも特別推薦をいただきましたので全国の学校でも上映され、長野県の子どもで中国残留孤児の



取材中の火砂子監督 事務所にて



令和元(2019)年 提供：(株)現代プロダクション

父・山本慈昭を知らない子どもは
いないと思いますよ」

火砂子監督は山田典吾監督と二人で被爆体験を持つ男児をテーマに書いた小説『はだしのゲン』の実録映画も製作している。

「自分たちが経験してきて、二度とああいう時代にはなつてほしくない。軍国主義の時代を生きた人間にとつては二度と嫌、ということですね。『はだしのゲン』は子どもたちのために作ろうと思いました」

平成29(2017)年には「蟹工船」で知られるプロレタリア文学作家、小林多喜二の母・セキの半生を描いた三浦綾子による小説『母』を寺島しのぶ主演で映画化。

「多喜二虐殺という本を読んだのは30代でした。その時は頭に血が上りこんな特高がいるのか、こんなひどいことをする人がいるのか、

か、そう思っていました。

三浦綾子読書会というのがありまして、その読書会の一人の生徒が偶然事務所いらした時に『母』を映画化したいね、という話になり、三浦綾子先生はもうお亡くなりになっていましたので、ご主人に資料を送り、著作権協会から許可をいただくことができました。

私も「ひどい特高のやつ」と思っていましたから、戦争の悲惨さを考えるきっかけになると思い、撮ることにしました。

平和ボケと言われてもいいじゃないの、平和が大事ですよ、と語り部の気持ちです」

女性の自立



今年、公開された『われ弱ければ矢嶋楯子伝』は、女性地位向上に尽くした矢嶋楯子の生涯を描いた三浦綾子の同名小説の映画化である。今年1月、熊本市で開かれた完成披露試写会後の取材で、矢嶋楯子の生涯に思いをはせ、火砂子監督はこう強調した。

「明治、大正期は妻が夫と離縁できない、一夫一婦制でない、馬1

頭の値段で女性が売られるなど、男尊女卑の社会でした。そんな中、彼女は必死で勉強し道を切り開いていった。日本の女性はもつと勉強し、声を上げるべきでしょう」

火砂子監督が新作で矢嶋楯子を取り上げることを決めたのは、前作『一粒の麦 荻野吟子の生涯』で荻野吟子が最も尊敬していた人物の一人だったからだ。

「吟子を映画化した時に楯子を知りました。吟子は夫に性病をうつされ当時は薬もなく子どもが産めなくなり、離婚します。明治は男の医者にかかるのが恥ずかしくて治らない病気を苦にして自殺までした女性がいた時代です。それで吟子は自分が医者になることを決意します。しかし当時の法制度では女性は医者になれませんでした。一生かけて日本の悪い風習、女性差別と闘って大変な苦労だったと思いますよ。その吟子が最も尊敬していたのが楯子でした。こんな女性もいたのかと原作を読んで驚きました。

楯子は武士と結婚します。夫の酒乱や暴力に悩みながらも我慢す

る日々でしたが、子どもに日本刀を振り回され離婚を決意します。女性から離縁状を書くなんてありえない時代ですから世間からは罵られ、打ちひしがれる日々の中で勉強をして40歳で小学校の教師となり、現在もある、女子学院の初代校長にまでなりました。89歳になってからアメリカに行き、軍縮会議にも参加しています。

婦人参政権運動や廃娼運動など、戸籍にお妻さんの名前を載せる時代に一夫一婦制も唱え、女性の私たちにとつては感謝しても、し尽せない93年の楯子の頑張った歴史を観てほしいと思います。

私のように90歳にもなれば、あちこち痛くてたえず寝ていたと思います。でも、それじゃだめなのです。楯子のように老いてもなお一層、勉強しようという気持ちを保持して生きてくださいと、皆さんにお願いしたいです。女性の皆さんが立ち上がったら日本はもっとよい国になりますよ。

次回作は障害当事者同士の結婚の実話を予定していますが、私も自分でシナリオを書いてみよう、そんな気になっています(笑)」

『われ弱ければ 矢嶋楯子伝』上映会のご案内は表3にて

※一部現代では使われない表現や語句が含まれていますが、時代的背景を考慮し、取材時の言葉をそのまま引用しております。